

1. 教育の責任

私は、本学こども未来学科こども養護コースにおいて「看護学」「看護実習Ⅰ」「看護実習Ⅱ」「解剖生理」「衛生学」「予防医学」の看護教育に関する科目を担当している。本学のこども養護コースでは養護教諭二種免許状が取得できるが、看護師の資格を持たない学生が、入学後に初めて看護や看護における専門用語というものに触れることになる。

1年次で学習する「解剖生理」は、学習成果評価項目⑨「地域社会の健康づくりをするための基礎的な力を身に付けている」⑩「ヘルスプロモーションの基本的理念を理解し、地域社会の健康づくりを実践していく総合的対応能力を身に付けている」の部分と特に関連している。解剖生理は、看護に関する科目、疾患などの基礎ともなるが、初めて耳にする用語が多く、自己の身体や日常生活動作などに関連させながら知識を身に付け、その後の学習につなげていくことが必要だと考えている。

2. 教育の理念

学生は、入学後に看護に関する講義を受講する。そのため、看護を学ぶ必要性および学習内容がどのように養護教諭の職務に関係しているのかを理解したうえで講義に臨んでもらうことを目指している。

また、学生が自ら学ぶ姿勢をもち、こどもの健康で安全な学校生活を送ることができるようアセスメント能力を身に付けることが必要である。学生が自らの力で主体的に考えることを重視していく。

3. 教育の方法

授業相互評価を行った「解剖生理」について主に述べる。開講時期は1年次の後期より半期15回構成で学習する。人体を形づくる骨格や内臓器の構造や働きを学ぶことになる。学生は前期で看護学や看護実習Ⅰで体の仕組みについて学んでいるため、それらを想起させながらより深い内容を考える講義とした。

解剖生理は自己の身体についての学習になるため、実際に身体を動かすことで関節の仕組みや筋肉の動きなどを学べるよう問いかけをおこない、考える機会を設けるようにしたことは、授業相互評価でよい評価を受けることができた。また、考えた内容をグループで発表するなど、考えを述べる機会や他の学生の考えなどを聞く機会、クラス全体へプレゼンテーションを行う機会を設けた。

教科書もわかりやすいようイラストが多く、なるべく学生がわかりやすい表現がされているものを選定した。

4. 教育の成果

学生の授業評価では、回答率37%、総合的な評価は5段階評価で5と回答した学生が90%、4と回答した学生は10%であった。「資料が見やすく書き込みができよかった」「自分の身体を使って確認できてわかりやすかった」との意見があった。定期試験では、60点に満たなかった学生が1名で、平均点は95点であった。専門用語が多く、名称や機能も難解なものが多く、学生にとってはなかなか理解しがたい科目ではないかと考えた。そのため、授業の初めに前回の復習を実施し、関連する問題を回答し解説を行うなど知識の定着ができるよう工夫した。

しかし、試験内容をみると、骨や筋肉の名称など暗記すれば解ける問題は正解率が高かったが、臓器の機能や生理的な機能の問題などは正解数にばらつきがみられた。覚える必要があるようにはあるが、身体全体の関連性は理解が不足していると考える。

養護教諭として児童・生徒の異常の早期発見を行うための視点に関しては、生理学的な理解が不足しており、フィジカルアセスメント力が弱く、状態を観察し、推論することに必要な基礎知識の習得は到達目標までには達していないと考える。

5. 今後の目標

解剖生理は、成長発達・疾患などを理解するための基礎となる科目である。骨格や臓器の機能など暗記だけではなく、自己の身体を基に想起させながら、それぞれの関連性を考えながら知識に結び付けていくことが必要である。そのため、事例や自分たちで体を動かし、グループワーク等をとおして知識の共有と理解を行っていくことが必要である。

また、看護学や看護実習などの科目とも関連するため、適宜学習したことを想起できるよう発問などをおこないながら、学生がさらなる興味・関心をもてるように、資料やスライドの工夫を行う。

学生の理解状況を細かく確認しながら講義を進めていくこと、日常生活の中から、今の子どもたちがどのような問題に直面し、原因としてどのようなことが考えられるか気づけるような関りや情報提供などを行っていく。